

音楽祭の時期変更に至る経緯と過程

－よりよい自治会活動に向けて－

やまもと しゅうへい
山本 修平（高校）

抄録：本校では、生徒による完全自治を基盤とした自治会活動が学校生活の中核を成している。今年度は、長年 2 学期に実施してきた音楽祭を、令和 7 年度より 1 学期開催へと変更した。時期変更の経緯とその教育的意義、ならびに課題を明らかにすることを目的とする。そして、自治会行事の在り方を単なる是非で判断するのではなく、試行と振り返りを重ねるプロセスそのものが自治教育として重要であることを示す事例として位置付けられる。

キーワード：自治教育 自治会行事 音楽祭 合意形成

I. はじめに

本校の校風は自主自立であり、生徒の自治活動が盛んな学校である。本校の自治活動は「生徒の完全自治」となっており、生徒たちに行事の運営や部活動の編成、予算管理など多くの部分を任せている。本校の学校行事は自治会行事と呼ばれ、理念、目的、実施時期、委員会編成、予算などを生徒が一から作り上げていく。自治会行事は三大大行事ともいわれており、その内容は附高祭（文化祭）・音楽祭・百軒徒歩（長距離遠足）となっている。自治会行事の実施時期は附高祭が夏休み明けの 8 月末～9 月上旬のどこか、音楽祭は 10 月末実施、百軒徒歩は 3 月に行われていた。

II. 音楽祭の課題

執筆者は本校で自治会顧問を 1 年、生徒指導部長を 3 年務めた。その経験から考える、音楽祭の課題は大きく 3 つある。

- ①開催部門が多岐にわたる附高祭（8 月末実施）の後に音楽祭（10 月実施）が開催されること
 - ②2 年生の 2 学期に行事が集中している
 - ③10 月実施のため 3 年生の参加率が低い
- この 3 点について詳しく説明する。

①の「開催部門が多岐にわたる附高祭（8 月末実施）の後に音楽祭（10 月実施）が開催されること」であるが、附高祭は模擬店・舞台発表・ステージ・デコレなど開催部門が複数あり、代表委員会で附高祭の原案が審議された後はその部門の数だけ特設委員会が設立される。それに対して音楽祭は歌唱の 1 部門である。

自治会顧問は、その年の 5 月頃から有志の生徒た

ちと、その年度の附高祭をどのようなものにしたいのか、またそれが実現可能な内容であるかについて話し合いを重ねていく。その過程では、生徒たちのやりたいことを尊重しつつも、学校として認めることができない事項については、適切に歯止めをかける必要がある。生徒に一方的な指示を出すのではなく、生徒の希望をすべて受け入れるのではなく、対話を通じて生徒たちの考えを現実的な形へと落とし込んでいくことが求められる。言葉にするのは容易であるが、このやり取りの感覚を実際に身につけることは決して簡単ではない。自治会顧問が、本校の特色である自治活動を支援する上での適切な距離感や関わり方を掴むには、それなりの時間を要する。特に、附高祭は開催部門が多岐にわたる行事であるため、自治会顧問として初めて生徒の自治に関わる場が附高祭であった場合、その難易度は一層高まる。

もし附高祭の前に、歌唱のみを扱う一部門制の音楽祭が実施されていれば、生徒たちの動き方や議論の進め方、さらには自治会顧問による支援の在り方についても、その感覚を掴みやすくなると考えられる。音楽祭を一度経験した上で、多部門で構成される附高祭に臨むことができれば、生徒・教員双方にとって段階的に対応力を高めていく、いわばステップアップの形が成立する。

この点は自治会顧問に限った話ではなく、学校生活や自治活動に初めて本格的に関わる新生徒である 1 年生にとっても、同様に当てはまることである。本校の自治を学ぶには音楽祭の後に附高祭を実施するという流れが適していると考えられる。

②の「2 年生の 2 学期に行事が集中している」については 2 学期は附高祭の準備からスタートし、8

月末に附高祭、10月に研修旅行、特別時間割、博物館見学、音楽祭、11月に地学実習、京都観考、12月に2学期テスト、SSHの発表、百軒徒歩の12月下旬見がある。さらに年度によってはアメリカやタイの留学生の受け入れも2学期に入ることもある。本校の自治会行事は2年生が中心となるため、2学期に行事が重なると生徒たちの力も分散してしまう。

③の「10月実施のため3年生の参加率が低い」については、かつては3年生の多くが受験勉強と並行して音楽祭の歌練習をしていたようだが、近年は国公立大学の推薦入試なども多様化しており、その準備のために音楽祭に参加しない生徒も増えていた。その年によるが、舞台上がる生徒が25名程度になってしまう3年生のクラスもあった。自治会行事は基本的に自治会員全員が参加することが前提で設計されている。その一方で「受験」という理由で複数名の生徒が参加しないのは、本校の自治活動に反する部分ではないかと思う。

執筆者がこの3つの課題の中でも特に課題に感じていたのは②と③である。

Ⅲ. 音楽祭の時期変更について

前述したように、2学期に行事が集中し生徒の力が分散していること、近年推薦入試が多様化し3年生の参加率が低くなっていることで、音楽祭に課題を感じていたが、これは教員が課題に感じていることであり、生徒たちが課題に感じていたかは別である。それを教員の一方的な都合で1学期開催にできないのが、本校の自治活動の難しさでもある。音楽祭はあくまでも自治会行事であり、「音楽祭をいつ実施するか」は、生徒たちに委ねられている。さらに、自治会行事の原案審議について代表委員会を開くときは3学年が揃っていることが基本である。しかし、音楽祭を1学期に開催する場合、前年度の2月に代表委員会を開く必要があるが、その場には新年度の高校1年生がいないことが大きな問題であった。そこで当期の自治会執行部会長と先期の自治会執行部会長に②、③の問題点を提起し、新年度の高校1年生がいない中でも実現できる方法を模索してもらった。

結論としては、新高校1年生が1学期実施の音楽祭に何も意見を出せないまま、実施するのはおかしいということで、新年度の4月、5月に高校1年生に向けた意見会を開くことで高校1年生の意見も取り入れた音楽祭にすることになった。

Ⅳ. 1学期実施をしてみても

音楽祭を1学期に実施後、音楽祭実行委員の生徒たちがアンケートを取った。

従来10月に実施してきた音楽祭について、今年度は開催時期を変更し、1学期（6月）に実施した。実施後、全学年の生徒を対象に自由記述形式のアンケートを行い、開催時期の妥当性や教育的効果について意見を収集した。以下では、その内容を肯定的意見と否定的意見に分類し、考察を加える。

1. 肯定的意見の傾向

(1) 3年生の参加率・主体性の向上

肯定的意見として最も多く挙げられたのは、3年生にとって参加しやすい時期であったという点である。従来の10月開催では、推薦入試や受験準備と重なることから、3年生の参加率が低下する傾向が見られていたが、1学期開催としたことで、3年生が精神的・時間的余裕をもって音楽祭に参加できたという評価が多く寄せられた。

「参加者が増えた」「クオリティが高かった」「気兼ねなく楽しめた」といった意見からも、開催時期の変更が3年生の主体的な関与を促したことがうかがえる。

(2) 行事配置の分散による負担軽減

2年生を中心に、行事が集中しやすい2学期よりも、1学期に音楽祭を配置することで、年間行事全体の負担が分散されたと評価する声が見られた。修学旅行や附高祭、定期考査との兼ね合いを踏まえると、学年によっては1学期開催が合理的であるとの認識が一定数存在している。

(3) クラス形成への早期効果

1学期開催により、音楽祭が「クラス最初の団結の機会」となった点を肯定的に捉える意見もあった。音楽祭を通じて協働する経験が、その後の附高祭や学級活動に活かされたという声もあり、早期の集団形成に一定の教育的効果があったと考えられる。

2. 否定的意見の傾向

(1) 1年生への負担の大きさ

否定的意見の多くは、1年生の負担感に集中していた。入学直後で人間関係が十分に形成されていない時期に、討論合宿・体育大会・音楽祭が連続したことにより、時間的・心理的余裕を持てなかったという指摘が多く見られた。

特に外部からの入学生にとっては、クラスメートの特性や得意分野を把握しきれないまま企画・練習を進めることが難しく、結果として完成度や満足度

が低下したという意見があった。

(2) 準備期間の不足

開催時期の前倒しにより、練習期間が十分に確保できなかったという指摘も多い。従来の 10 月開催時には存在していた特別授業期間（4 時間授業）がなくなり、放課後練習に依存せざるを得なかった点が、完成度や達成感に影響したとの声が見られた。

(3) 他行事・部活動との重複

体育大会、附高祭準備、定期考査との時期的重複により、行事間の切り替えが難しかったという意見が複数見られた。また、部活動の大会時期と重なることで、クラス練習への参加が困難になる生徒もあり、とりわけ運動部の 3 年生からは活動時間の確保に関する懸念が示された。

3. 総合的考察

本アンケートは、音楽祭実行委員の生徒が中心となって作成したものであり、質問項目には「1 学期開催が適切であったと思うか」といった定量的に評価可能な設問は含まれていなかった。そのため、学年全体としての賛否の割合や温度感を数値として把握することは困難である。

一方で、自由記述の内容を総合的に読み取ると、全体の 6 割強の生徒が、1 学期開催に対して何らかの戸惑いや違和感を抱いていたと推察される。特に、準備期間の短さや行事の集中、1 年生の負担感に関する指摘が多く見られたことから、開催時期の変更が生徒の学校生活に与えた影響は小さくなかったと考えられる。

しかしながら、従来の実施時期を変更するなど、学校行事に大きな変化を加えた場合、一定数の否定的意見が生じることは一般的である。したがって、自由記述において否定的な意見が多く見られたことのみを理由として、直ちに従来の 10 月開催へ戻す判断を行うことは、必ずしも適切とは言えない。

むしろ、本アンケート結果は、「開催時期そのものの是非」を問う材料であると同時に、「どのような条件が整えば、より良い音楽祭を実施できるのか」を検討するための重要な示唆を含んでいると捉えるべきである。準備期間の確保、他行事との調整、学年差への配慮など、運営面の課題を明確にした上で、生徒自身が主体となって改善策を話し合うプロセスこそが、本校が大切にしてきた自治教育の実践につながる。

開催時期の変更を良い・悪いで結論づけるのではなく、「どうすればより教育的効果の高い音楽祭を実現できるのか」という視点を生徒と共有し、次年

度以降の行事運営に活かしていくことが、今後の課題である。

V. 2 学期アンケート

2 学期の後半に 2・3 年生を対象に、音楽祭の 1 学期実施について再度アンケート調査を行った。

質問項目は以下の 3 つ

- ・「今」、振り返ってみて 1 学期開催は適切だったと思いますか？（4 件法）
- ・開催時期についてご意見があれば教えてください。（自由記述）
- ・今、振り返ってみて、音楽祭全体に対してご意見があれば教えてください。（自由記述）

このアンケートについての結果は以下（図 1）である。

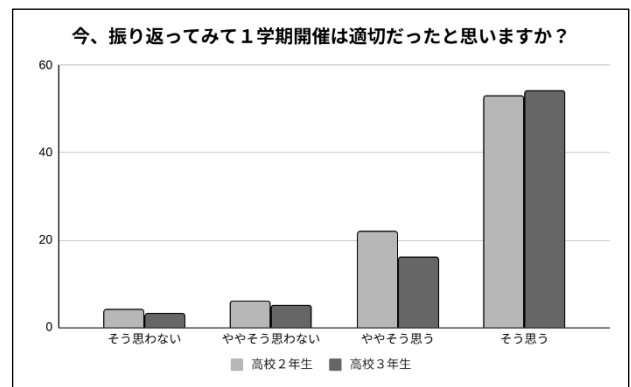


図 1 音楽祭の開催時期についてのアンケート結果

次に自由記述についての考察を行う。

本アンケートは、実施直後ではなく一定期間を経た後の振り返りである点に特徴があり、生徒が行事全体や学期構成を俯瞰したうえで評価していると考えられる。

以下では、自由記述を肯定的意見と否定的意見に整理し、総合的に考察する。

1. 肯定的意見の傾向

(1) 3 年生の負担軽減と参加意欲の向上

2・3 年生の回答において最も顕著であったのは、3 年生にとって 1 学期開催が非常に適切であったという評価である。

推薦入試や模試、受験準備が本格化する 10～11 月に行事が配置されることへの心理的・時間的負担が大きいことが、多くの記述から示された。

「秋に音楽祭があったら精神的に耐えられなかった」「11 月開催だと身が入らない」「受験生にとって 6 月は余裕をもって楽しめる」といった意見から、1 学期開催が 3 年生の主体的参加やクオリティ

の向上につながったことがうかがえる。また、前年と比較して参加人数が増え、音楽祭全体の完成度が高まったと評価する声も多かった。

(2) 2年生にとっての行事分散効果

2年生からは、研修旅行での委員会活動が集中する2学期を避け、1学期に音楽祭を配置したことを肯定的に捉える意見が見られた。

特に、研修旅行委員や附高祭委員の立場からは、9～10月開催では負担が過度になるという現実的な指摘があり、学年全体の年間スケジュールを踏まえると合理的な配置であったとの評価が示された。

(3) 学期構成・行事間の切り替えのしやすさ

音楽祭から附高祭への移行がスムーズであった、行事間の切り替えがしやすかったという意見も一定数見られた。従来指摘されていた「附高祭直後に音楽祭があり、気持ちの切り替えが難しい」という課題が改善された点は、1学期開催の成果として評価できる。

2. 否定的意見・課題として挙げられた点

(1) 1年生への影響に対する懸念

本アンケートは2・3年生対象であるものの、自由記述の中では1年生への負担を懸念する声が多く見られた。

入学直後でクラスの雰囲気十分に形成されていない中、討論合宿や体育大会と連続して音楽祭を迎えることは、1年生にとって過度な負担となっている可能性が指摘された。

「6月開催自体は妥当だが、1年生には配慮が必要」「サポートがあればより良くなる」といった意見からは、開催時期そのものよりも、学年差への対応が重要な課題であることが示唆される。

(2) 準備期間の短さとクオリティへの影響

肯定的評価が多い一方で、準備期間の短さに起因する問題点も繰り返し指摘された。

練習時間が十分に確保できなかった結果、演出や音源に依存する傾向が強まり、「音楽祭としての質が十分でなかった」と感じた生徒も存在する。

また、有志団体の準備期間が短かったことに対する指摘や、開催時期変更の周知が十分でなかった点を課題とする声もあり、制度変更に伴う情報共有の在り方について改善の余地があることが明らかとなった。

(3) 行事配置の偏りへの違和感

音楽祭を1学期に移した結果、2学期後半の行事が少なくなり、「物足りなさ」や「学年最後の集大成となる行事がなくなった」という感覚を持つ生徒も一定数存在した。

この点については、音楽祭単体の是非ではなく、学校行事全体の年間配置の問題として捉える必要がある。

3. 総合的考察

12月時点での振り返りアンケートからは、2・3年生を中心に、1学期開催を肯定的に評価する意見が多数を占めていることが読み取れる。特に、受験期の負担軽減や参加率向上といった点において、開催時期の変更は明確な効果をもたらしたといえる。

一方で、1年生への影響、準備期間の確保、有志団体や委員会活動との調整といった課題も浮き彫りになった。これらは開催時期を元に戻すか否かという二者択一の問題ではなく、1学期開催を前提とした運営上の改善によって解決可能な課題であると考えられる。

以上より、音楽祭の1学期開催は、特に上級学年にとっては適切な判断であったと評価できる一方、学年差への配慮や行事全体の再設計を通じて、より教育的効果の高い行事へと発展させていくことが今後の課題である。

VI. 1学期アンケートとの比較

最後に、音楽祭の1学期開催について、
①実施直後に行った全学年対象のアンケート（以下「1回目アンケート」と、
②12月に2・3年生を対象として行った振り返りアンケート
の2種類の調査結果から、両者を比較することで、生徒の評価や意識が時間の経過とともにどのように変化したのかを考察する。

(1) 評価の視点の変化

1回目アンケートでは、「準備期間の短さ」「行事の過密」「1年生の負担」といった、実施直前から直後にかけての体験的・感情的な負担感に関する記述が多く見られた。特に1年生を中心に、「早すぎる」「忙しすぎる」「クラスがまとまらないまま本番を迎えた」といった否定的意見が目立ち、全体としては開催時期の変更に対する戸惑いが強く表れていた。

一方、12月に実施した振り返りアンケートでは、こうした即時的な負担感よりも、年間行事全体や進

路状況を踏まえた俯瞰的な評価が増加している点特徴的である。特に3年生からは、「受験期に行事が重ならなかった」「精神的に余裕をもって参加できた」といった長期的視点に基づく肯定的評価が多く示された。

(2) 学年差に対する認識の深化

1回目アンケートでは、学年差が主に「不公平感」や「負担感」として語られる傾向があった。すなわち、1年生の過密なスケジュールや、部活動・行事との重複による困難が、開催時期変更の問題点として強調されていた。

これに対し、12月アンケートでは、2・3年生を中心に、学年ごとに置かれた状況の違いを踏まえた評価が多く見られるようになった。「1年生には負担が大きいが、3年生にとっては最適である」「1学期開催を維持するなら1年生への配慮が必要」といった意見に代表されるように、開催時期そのものの是非よりも、学年差を前提とした改善策の必要性が意識されるようになっている。

(3) 開催時期に対する評価の変容

1回目アンケートでは、自由記述全体から、約6割強の生徒が1学期開催に対して否定的、あるいは消極的な評価を示していると推察された。これは、従来の10月開催という既存の枠組みからの変化に対する違和感や、準備不足感が強く影響していたと考えられる。

しかし、12月アンケートでは、「1学期開催が適切であった」「この時期で良かった」「変更は正解だった」と明確に肯定する意見が多数を占め、特に3年生においては、1学期開催を支持する声が目立った。このことから、時間の経過とともに、生徒の評価が短期的な負担感から長期的な合理性へと移行したことが示唆される。

(4) 自治教育の観点からの示唆

両アンケートの比較から、行事改革に対する生徒の受け止め方は、実施直後と一定期間経過後とで大きく異なることが明らかとなった。1回目アンケートに見られた否定的意見は、行事運営上の課題を浮き彫りにする重要な示唆であり、12月アンケートに見られた肯定的意見は、改革の意義や成果を再評価する視点を提供している。

この2つの段階的な意識変化は、単に賛否の揺れとして捉えるのではなく、生徒が自治会行事を主体的に捉え、改善点を考え始めた過程そのものとして評価できる。すなわち、行事の在り方を一度で完成

させるのではなく、試行と振り返りを重ねるプロセス自体が、本校の自治教育の実践につながっていると考えられる。

(5) 比較考察のまとめ

以上より、1回目アンケートは「実施直後の体験的評価」を、12月アンケートは「時間を経た俯瞰的評価」をそれぞれ反映しており、両者は対立するものではなく相補的な関係にあるといえる。

音楽祭の1学期開催については、短期的には課題が顕在化したものの、長期的には上級学年を中心に一定の成果が認識されるようになっており、今後はこれら両面の声を踏まえた改善的運営が求められる。

VII. 最後に

今年度、音楽祭を1学期に実施できたことは、本校の学校行事及び、自治会行事の在り方を見直す上で大きな収穫であったと言える。一方で、すべてが円滑に進んだわけではなく、1学期アンケートおよび2学期アンケートの考察からも明らかのように、練習期間の短さや、附高祭の実施案審議との間隔が詰まったことによる負担感など、いくつかの課題が残された。

音楽祭開催直後に実施したアンケートでは、特に1年生を中心に「準備期間が十分に取れなかった」「クラスの関係性が十分に築けていない中での実施は難しかった」といった戸惑いの声が多く見られた。一方で、3年生からは「受験期と重ならず、全員で参加しやすかった」「例年より参加率が高く、音楽祭を楽しむことができた」といった肯定的な意見も多く、学年間で受け止め方に差があることが確認された。

その後、2学期後半に実施した2学期アンケートでは、時間をおいて振り返ったことで、1学期開催の意義を再評価する意見が増加した。特に2・3年生からは、「2学期以降の行事負担が軽減された」「受験や研修旅行と重ならず、結果的に適切な判断だった」とする声が多く、当初は戸惑いを感じていた生徒の中にも、開催時期変更のメリットを実感する様子が見られた。その一方で、「1年生への配慮が必要である」「練習期間や他行事との調整は今後も検討が必要である」といった冷静な指摘も継続して挙げられており、課題が完全に解消されたわけではないことも明らかになった。

長年続いてきた2学期開催から1学期開催へと大きく舵を切った以上、一定の混乱や賛否が生じるのは避けられない。重要なのは、そこで表出した課題

や意見を一過性のものとして終わらせるのではなく、「どうすればより満足度の高い音楽祭にできるのか」という視点で次につなげていくことである。その検討の中心となるのは、その時々生徒であり、生徒自治を支える生徒指導部の教員であってほしい。

今回の音楽祭の時期変更を通して得られた知見が、今後の音楽祭をはじめとする自治会行事の在り方を考える際の一助となり、生徒主体の行事づくりがさらに発展していくことを期待したい。

The Background and Processes Leading to Changes in the Scheduling of the School Music Festival

～ Toward the Improvement of Student Council Activities ～

YAMAMOTO Shuhei

Abstract: At our school, student council activities based on full student autonomy form the core of school events. In the 2025 academic year, the school music festival, traditionally held in the second semester, was moved to the first semester. This study aims to clarify the background and processes of this change, its educational significance, and the challenges that emerged through its implementation.

Rather than evaluating school events solely in terms of whether such changes are right or wrong, this study positions the process of trial, reflection, and improvement itself as a meaningful practice of autonomy-based education.

Key Words: autonomy-based education, student council events, school music festival, consensus building